

日本語の表記一語の書き表わし方一

日本語の表記は難しい。数多くの漢字に加え、平仮名・片仮名が使われる。そして、面倒なことに、それらの使い分けの基準が明確でない。そのため、単に、文字を覚えればよいではすまされない。さらに、日本語では正書法が確立していない。いわゆる「正しい書き方」が決まっていない。例えば、「計る／測る／量る／はかる」や「申し込み／申込み／申込」のいずれの書き方が正しく、いずれが間違いかを即答できる人はいない。

以下に、このような日本語表記のあり方について、書き手が表記面でどのようなことに留意するとよいかを述べる。ただしここでは、話題を「語表記」に限り、数量の表記法、句読点を含む記号の使い方などには触れない。

1 日本語表記の基本

1.1 漢字仮名交じり文—文章表記の基本—

日本語の文章は漢字仮名交じりが基本である。漢字と平仮名が中核をなし、それに片仮名が加わる。したがって、文章を書くときに、語表記で漢字、平仮名、片仮名の3種類の使い分けが課題となる。その他、数量表記では算用数字か漢数字かという問題もあるが、ここでは、ひとまず措^{おく}く。

使い分けの原則を知るために、次の例文で考えよう。

(1) 辞書を使って単語の意味や用法を調べる。

この文を、意味の切れ目にはば一致する文節で区切ると、

(2) /辞書を/使って/単語の/意味や/用法を/調べる/。

となる。この漢字と平仮名を■と○に置き換えると、

(3) /■■○/■○○/■■○/■■○/■■○/■○○/。

となる。斜線の直後には■があり、斜線の直前は○が来ている。つまり、文節は漢字で始まり平仮名で終わるブロックと一致しているのである。

よって、文を読むとき、■で始まり○で終わるまとまりを、1つのブロックと認識すれば、次の(4)のように、意味のまとまりごとに分割してとらえることができる。

(4) (辞書を) (使って) (単語の) (意味や) (用法を) (調べる)。

結局、日本語の文章では、漢字と平仮名があることで、意味のまとまりが認識しやすくなっている。欧米の多くの言語では、単語の前に空白をおく分ち書きによって、語のまとまりを示している。それに対して、日本語で分ち書きをしないのは、漢字と平仮名との混在によって意味のまとまりを示せるからである。だから、漢字と平仮名の使い分けにあたっては、意味のまとまりが区別できるように留意することが、読みやすい表記のために有効だと言える。

1.2 漢字と仮名の使い分け

そのような漢字と平仮名の有効な使い分けとは何か。文節は、

文節 = 1 個の自立語 (+ 付属語)

で表わすことができる。自立語が1つあり、付属語はないときも複数のときもある。自立語は、意味が明確で、漢字で書かれやすい。他方、付属語は助詞と助動詞で、普通は平仮名で書かれる。よって、(2)や(3)のように、文

節が漢字で始まり平仮名で終わるパターンが多いのは当然なのである。

ただ、自立語がすべて漢字になるわけではない。例えば、

(5) 雨が上がり、それで、決勝戦はやはり行なわれた。

の「それ」「やはり」は、自立語だが平仮名で書かれやすい。その理由としては、いずれの語もこの文における重要度の低いことが考えられる。その証拠に、(5)からこれらを省いて

(6) 雨が上がり、決勝戦は行なわれた。

としても、元の(5)の中心的な意味が損なわれない。重要な語句の部分には漢字を当て、そうでない部分を平仮名で書く傾向を認めることができる。それによって、漢字部分を中心に読み取れば、意味を理解できるようになっている。したがって、漢字と平仮名の使い分けの基準に、語句の重要度を用いると、文意が取りやすくなると言える。

以上を踏まえると、読みやすい表記のためには、漢字、平仮名、片仮名について、次のような使い分けの目安が有効となる。

① 漢字は、実質的な意味・概念を表わす部分に使う。

② 平仮名は、意味の上で重要度の低い、次のような部分に使う。

ア 助詞・助動詞

イ 用言の活用語尾

ウ 形式名詞・補助用言

エ 接続詞・感動詞・副詞

オ 音声を表記するための部分

これらのうち、ア、イは常に平仮名で書く。漢字で「迄^{まで}」「様だ」などを書くのは避けるのがよい。それに対して、ウ、エは、常にとは言えないが平仮名で書くことが多い。ウで、例えば「…するとき」「…してほしい」などは実質的な意味が薄いので平仮名が望ましい。

オは、「だ、だ、駄目だ」の下線部分のように音声を表わしたり、「そこは工場^{こうじょう}というより小さな工場^{こうじょう}だった」の振り仮名部分のように漢字の読み方を指定したりするものである。

③ 片仮名は、実質的な意味・概念を表わす語句だが、漢字で表記できないものや、平仮名で表記すると読み取りにくくなる部分に使う。具体的には、次のようなものである。

ア 外来語・外国語、外国の人名・地名

イ 専門用語、動植物名、俗語・隠語

ウ 擬音語・擬態語

これらのうち、アは片仮名の典型的な使い方である。イは、常に片仮名で書くわけではないが、片仮名で書くことで、特殊な世界や専門分野のものであることを示すことができる。ウは「目はチカチカ、頭はガンガンする」のように、片仮名で書くことで、前後の言葉との区切れ目を示す効果がある。

2 正書法と望ましい表記

2.1 正書法と語表記のルール

日本語では正書法が確立していないと言っても、ルールめいたものが全く存在しないわけではない。語表記に関するものとして、

(1) 常用漢字表 (2010年内閣告示)

(2) 送り仮名の付け方 (1973年内閣告示, 2010年一部改正)